

本邦商品思想の諸問題と商品学 創設への影響

——大和本草・物類品隲・日本山海名物図会・
日本山海名産図会などを中心として——

浅 岡 博

1 序

資本論冒頭部にある「諸商品の諸使用価値は独自の一学科である商品学に材料を提供する」という言葉は、凡そ商品学関係者にとっては周知の言葉である。この商品学については、わが国では現在社会科学の範疇に属するものとして、大かたの承認を得ているが、国によっては自然科学に属したのものとして取扱われているとも聞く。そしてその言うところの要旨は、使用価値としての使用価値の理化学的な検討ということを称しているようである。対象に対する認識・方法論的な違いからくるものであろう。今日の社会科学のうちには、自然科学を自己のうちに包摂せざるを得ない傾向が進行している。また、自然科学の発展はその対象である自然そのものからは進歩の要因は与えられない。それは社会的土台の一つである生産力から技術を通して、最も直接的、また強力な動力を受ける。したがって自然科学も社会科学を包摂せざるを得ない。そして一つの科学¹⁾が生れるであろう。

さて、商品学の歴史については、また次のようなことがよく知られている。商品に関する学問の最初のものとして、1部の学者は1549年におこされたイタリアの医師フランシス・ブオナフェーデ (Fr. Bounaféde) の薬学商品群 (Pharmazentische Waren Gruppe) の研究をもって、後代における商品学の源流だと観ているが、しかし、それは生薬学 (Pharmakognosie) の端緒をなすものであって、商学の一分子としての商品学の発生は、1650年前後におけるフランスやドイツに

興った商取引学にその源流を求めるのが妥当であろう、ということから始まり、フランスのサヴァリー (Jacques Savary) の『商人必携』(1675年)、ドイツのマールベルガー (Paul Jakob Marperger) の『博学の商人』(1717年)、ルドヴィッチ (Carl Grünther Ludvici) の『商人大学』(1756年)等の書物があげられる。次でベックマン (Johann Beckmann) のゲッティンゲン大学での商品学最初の開講 (1780)そして『商品学序論』(1793年)〈Vorbereitung zur Waarenkunde, oder zur Kentniß der vornehmsten ausländischen Waaren〉の著作。そこで彼は商品学の始祖といった叙述が一般化している²⁾。ところで商品学の歴史は一般の商品学教科書では簡単に取扱われていて、その占める頁数は僅かなものである。ベックマンに関していえば、近来やっと商品学視点で彼の諸著作を通して彼の検討が行なわれてきた³⁾が、従前は商品学の始祖といわれながら、さてその詳しい資料は商品学関係書の中では求められず、むしろ彼は最初の技術学体系者として著名であるので、技術学史関係者の手になるものから一方的に資料を求めるといった状況であった。

近年、商品学本質論に絡んで、従前の商品学の批判、検討の意味を込めて商品学の歴史認識が1部関係者の間で強く意識し活動化されてきている³⁾。その結果、従前の定説的所説はまた訂正を受けざるを得なくなった。新資料の発掘、再解釈により常に歴史は生き返り発展している。商品学史もまたその例に洩れない。小論は本邦商品学史の実証的展開として、先づ従前、史前史として放置された部分を取上げ、過去の定説に再検討あるいは補足を加えるものである。

さて、以下に展開される叙述は、自然を直接対象としたものでない。この限り小論は自然科学研究の範囲には入り得ない。ところで本邦商品学の源流は博物学、本草学へとつながり、そこではまぎれもなく自然科学範疇に入った。この本草学の変遷・分化を検討、理解するのが小論の意図でもある。自然科学研究年報へ取て小論を投稿するに対して諒解を乞う以所のは、商品は労働生産物の一歴史的形態であり、商品学も他日は高度神農本草経に立ち戻り、ここでは一つの科学が成

立するということである。

- 1) マルクス；経済学・哲学手稿，国民文庫，p. 158.
- 2) 上坂西三；商品学序論，p. 13.
- 3) 風巻義孝；商品研究，23—1・2，(1972).
浅岡 博；比較商品学書論考—ヨハン・ベックマンと平瀬徹斎，日本商品学会第 25 回全国大会（昭和 49 年）発表。
石井澄夫；商品研究，24—1・2 (1973).

2 過去の論文

本邦商品学の源流は本草学である，ということは既に記したように大かたの認めるところであるが，細部に立ち入っては商品学関連知識として具体的，体系的なものを持ってはいない。また学界自体余りこのことに深入りしようとしたこともなかった。学会共有財の文献を探ると，南種康博氏の『日本商品学会最近 20 年史』（昭和 18 年，横浜高等商業学校創立 20 周年記念文集）に，本邦の事情が史前史として叙述されているに過ぎない。これは商品学母胎の起源を述べ，わが国に於る斯学の発生および沿革を記したものであるが，先づ前史部分の概要を記すと次のようである。（事項・事物，人名は原文のままて訂正しなかった。）

わが国の医学の祖は大国主尊と少彦名尊の 2 神である。薬品は外傷用に動植物質のものをを用い，内科的治療はまじなひを主としたものらしい。大陸との交通開けて医術が伝わった。欽明天皇 23 年，梁の武帝の後裔知聰来朝し，内外典薬書などを献上した。文武天皇の朝，大宝律令には典薬寮に薬園師と薬園生の 2 官があった。薬園師の教科書として，陶弘景の『集註神農本草』が用いられた。80 余年後の延暦 6 年には蘇恭の註に成る『新修本草』が用いられるようになった。清暦の子和気広世は典薬頭となり自著『薬経大素』を講じた。同書は 2 卷より成り草木，果実，虫獸，玉石等 254 種の薬品につき味および主治を論じたものである。平城天皇は古来伝える所の薬方を蒐録類撰せしめて『大同類聚方』100 卷を選ばしめた。醍醐天皇の延喜年間，知聰の後裔深江輔仁は『本草和命』2 卷を撰した。これには玉石 81 種，

草 257 種, 木 110 種, 獣禽 69 種, 虫魚 113 種, 果 45 種, 菜 62 種, 米穀 35 種, 有名無名 193 種, 合計 1025 種が収められている。さて、徳川時代になり諸学大いに振興した。林道春は慶長 11 年, 李時珍の『本草綱目』を幕府に献上した。幕府は本草学を奨励し, 薬園を開いた。そこで儒者で本草学の大家として中村楊斎, 新井白石, 貝原益軒, 向井元昇, 稻生若水, 平野必大, 寺島良安などが輩出した。そして本草学は医学から独立した 1 学科となって, 動植物の名称・効用・来歴等を講究して専ら物産を弁知するのを目的とするようになった。林道春は『多識論』, 新井白石は『詩經名物図』, 貝原益軒は『大和本草』, 寺島良安は『和漢三才図』等を著した。また蘭学の普及が本草学の内容を豊富にして, 一層進歩せしめるに与って力があつた。元禄年間来朝したドイツ人エンゲルバート・ケムプファー, 安永年間スエデンの大植物学者で解剖学に通じた外科医カルル・ベートル・ツムベルク, 文政年間に来朝した医学, 植物学の大家であるドイツ人フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトなどはわが学界を啓発した。そしてシーボルト門下では高野長英, 伊藤圭介, 戸塚静海等が輩出し, 現代科学の基礎となった。幕末には以上の人々のほか, 平賀源内, 宇田川榕庵, 川本幸民等の自然科学者がいた。源内は讃岐支度藩の出身, 本草学および医学に興味を覚え, 長崎で蘭学および本草学を学んだ。物産会を開催し蒐集陳列した 2000 余点の草木, 禽獣, 魚介, 昆虫, 金玉, 土石また和漢蘭葡等の薬品類の目録を編纂し, これに学名, 和名, 分類, 産地, 図および解説を加えて『物類品隲』6 巻を著して出版した。榕庵は『菩多尼訶経』『舎密開宗』等を著した。川本幸民は蘭学を修め, 洋書調所教授となり, 『理学原始』『舎密読本』等多数の著述を行った。これらの先覚者達が多年に渉って今日の商品学の母胎である諸学を研究し, 後進のため準備してくれた。以上が概要である。

さて, 南種論文により, 前史として記述された諸事項は本邦諸文献によりその生起が伝えられている現象であるが, 本草学に関与して生起した一連の諸現象の解釈は粗雑であり, 記述のための資料蒐集に於ても不足の点がある。本草学の発展分化, 『物類品隲』の商品学史上

の意義などについても深い認識を認めたい。そこで以下では本邦本草学の発展を改めて記してみる。

3 本草学の進展——物産学

本邦の本草学を知ろうとする者にとって、白井光太郎『日本博物学年表』は、重要な古典である。この書物は初版が明治 23 年であり、同 41 年増訂再版された。昭和 7 年に著者の急逝によって、昭和 9 年に改訂増補の形式で第 3 版が発行された。筆者の参照したのは昭和 18 年第 3 刷、A 5 版 437 頁のものである。年表凡例の記載事項の 1 部を引用して、本書の概要を述べておこう。

本書で取上げる博物学と称するのは、動植鉱物に関する智識を網羅した学術の意味であって、昔はこれを分けて本草学・物産学・名物学の 3 科としたものである。そして本邦博物学に関する旧聞遺事、先輩の生没、著述の年月、薬園の興廃、本草会の状況、政府の施設、動植物舶来の歳月等を蒐録した編年史である。したがって本邦博物学の起源沿革および師授伝統の一般を知ることができる。ただし、博物学の進歩の状況を叙述するのが目的であるので、明治以後の記事は多く省略されている。小論もまた明治以前を取上げるので、明治以後の純正博物学時代には立ち入らない。

さて、南種論文中にてでくる諸事項はどのような資料から採ったのか、その資料出所の記載が一切無いので不明であるが、この博物年表にはいずれも記載されているものばかりである。そこで、次に白井氏の解説によって本邦本草学の発達を覗いてみると、次のようにいわれている。

本邦の博物学の歴史を考えると、上古から今日に至るまでに、凡そ次のような 3 期の沿革を経過している。

第一期 本草学時代（上古から徳川氏に至る）

第二期 応用博物学時代（徳川氏から明治の初めに至る）

第三期 純正博物学時代（明治の初めから今日に至る）

さて、第一期の本草学時代であるが、この時代には諸種の学術がな

おまだ興隆期に達しないので、博物学のようなものは、常に医学の1部をなしていた。そして専ら薬物を弁知し、その気味能毒を考明することが目的であった。したがって、当時の博物学は医学とその盛衰を共にしていた。南種氏の掲げた諸事項以外のものを更に幾つか年表から拾い、また筆者の事項説明補足をも加えて記すと、次のような事蹟がある。

19 代允恭帝、既位3年、正月帝は病にかかった。朝議して良医を新羅に求めた。8月新羅から金姓、武名という者が調貢の大使兼医師として来朝、天皇の疾を治療した。これが本邦に於て韓医法を採用し、また医学が伝播する初めである。韓土本草学の初めて本邦に伝来したのもこの時であろう。

43 代元明帝、6年諸国に詔して『風土記』を上廷させた。これには各地の物産の記述があるが、多くは亡佚してしまい、現存するものは少ない。

59 代宇多帝、寛平年中、陸奥守兼上野権介藤原朝臣佐世勅を奉じて『日本国現在書目録』を撰した。当時朝廷の蔵書は16,790巻、これを40家に類別してあり、医方書は1,309巻あった。これらの書籍は代々入唐した学士および帰化人の持参したものである。漢文学および漢医方の盛んに行なわれるにしたがって、一は薬物学上より、一は諸書・経伝・農書等の名物を理解する上から、諸物の漢名を講究する必要を生じ、遂に『新撰字鏡』が著述された。和漢対訳書の始である。

以上の諸事蹟から考えて、本邦の医薬の研究は遠く神代に起っているが、19代允恭帝の時代になって新羅から韓医方伝来し、36代孝徳帝の世に遣唐使を派出し、直ちに漢土の文物を輸入¹⁾するようになって、漢学が次第に行なわれ、本草学の他に名物学がその萌芽を出し始めた。そして中古、王政の衰微するに従い諸学も衰えたが、足利氏の末葉から漸次振興し始めたのである。

第二期 応用博物学時代 この時代とは博物学がややその範囲を拡張し、従来あったところの本草学の他に、あまねく動植諸物の形状、名

称、効用、来歴、産地等を講究する物産学および詩書を初めとして、文学、歴史に現れた物類の名称、形状、異名、方言等を講究する名物学が勃興した時代である。そしてその講究の範囲を拡張するに従って、1部門、1部類につき深く研究する必要が生じて、遂に各種の専門家が出現するようになり、著書にも専門的なものが出るようになった。例えば、一般の本草の他に、食物本草、救荒本草、和蘭本草、本草正譌、大和本草の類があり、物産書には海内諸州の産物志のほか、琉球産物誌、蝦夷産物誌、和蘭産物考、舶来産物考、海島産物誌、諸州採薬記の類を出し、名物の書には庶物類纂を初めとして古今要領、和漢三才図会、詩経名物考、経伝穀名考、万葉名物考、物品識名等々の類が現われている。その他、1部門、1部類に関するものに至っては、枚挙に遑のない程である。草木図説、本草図譜、地錦抄、花彙のように一般植物の種類を集録したのものが、人参譜、菌譜、桜譜、梅譜、菜譜、花譜等々のように薬用植物、食用食物、庭園植物、挿花植物、盆栽植物、有毒植物等の1部類について記述したものもある。また動物書では鯨譜、鳥譜、魚譜、介譜、虫譜の類があり、金石の類を集録したものには、石品考、怪石誌、雲根志、石綿論等がある。

さて、この時代は本邦商品学史上でも詳細に開明して置かねばならぬ重要期であるので、年表中の特に関連性の深いと思われる諸事蹟を引用して置こう。(原文文語)

慶長8年(1603)、加藤宗乾『本草序例』を上木した。

慶長12年(1607)、林道春長崎に行き、『本草綱目』を入手し駿府に献上した。

慶長17年(1612)、林道春『本草綱目』を抜写して、これにふり仮名をつけて『多識篇』5巻を著した。

慶長18年(1613)、曲直瀬玄判著『日用食性』発行される。

慶安4年(1651)、京都の書店山屋治右衛門は、李東垣『食物本草』および呉海寧『日用本草』に訓点をつけて10巻として翻刻した。

寛文6年(1666)、釈元政は『食医要編』を作り食品の性効を述べた。京都の儒士中村揚斎は『訓蒙図彙』21巻を著した。

寛文9年(1669), 長崎の訳官, 西吉兵衛は外国物産の品類を輯録し、『諸国土産書』を作った。名護屋玄医は『関甫食物本草』上下2巻を著し, 穀菜, 水草, 菌, 草, 魚, 介, 禽, 獣の食品290の種の気味能毒を弁明した。

寛文11年(1671), 向井元升は『包厨備用大和本草』13巻を撰び, 動植の食品凡そ400余種の形状, 能毒, 和漢の名称を弁明した。

天和3年(1683), 高田玄柳『湯液片玉本草』が発刊された。この書物は日用の薬品200余種を選んで, 和名を正し, 名義を弁じ, 修治を詳にして, これをイロハ順に排列して, 検索に便利にしてある。

元禄5年(1692), 稲生若水『物産目録』1巻を著し, 穀34, 菽22, 蕨135, 果100, 草220, 花148, 菌20を列挙した。

元禄7年(1694), 新井白石, 『詩経名物考』を作った。

元禄8年(1695), 人見元徳(野必大), 『本朝食鑑』12巻を撰し, 食用品物の能毒を記述した。西川忠英, 『華夷通商考』2巻を著し, 支那, 朝鮮, 琉球, 台湾, 印度諸島, 西洋各国の気候, 風土, 産物を記述した。

元禄9年(1696), 稲生若水, 『庶物類纂』の編纂開始。362巻で若水は死んだ。享保4年將軍吉宗は丹羽正伯等に命じて増修し, 1,000巻に到した。

宝永3年(1706), 井田昌胖白圭, 『柑橘伝』1巻を著し, 柑橘の品種20種の名称, 気味, 産地等を記載した。

宝永5年(1708), 貝原益軒『大和本草』16巻の原稿完成した。

享保5年(1720), 新井白石『蝦夷志』1巻を作り, 蝦夷, カラフトおよび千島などの地理, 物産, 風俗を記述した。

享保14年(1729), 通詞今村市兵衛, 吉雄忠次郎『阿蘭陀本草』を翻記した。

享保15年(1730), 佐渡の灌園道人『佐渡産物志』3巻を著す。

享保19年(1734), 青木文蔵甘藷の民用に益のあるのを知って, 『農政全書』その他の書を参考にして, 効用, 栽培法, 食法等を筆記し『甘藷記』と題して, 大岡越前守忠相に上書した。幕府は諸藩に命

じて産物目録を呈出させた。南部藩は『産物帳』を幕府に上呈した。

元文元年(1736)、水戸藩『御領内産物留』、『伊豆国産物并絵図帳』、内山覚中編『越中国産物之内絵形』2冊、岡村多仲編『美作国津山領産物絵図帳』2冊、『伊賀国産物之内絵図帳』2冊、『伊勢国藤堂和泉守領産物之内絵図帳』等完成する。

寛保2年(1742)、野呂元丈『壬戌阿蘭陀本草和解』1冊を作った。

宝暦4年(1754)、平瀬徹斎『日本山海名物図会』を著した。(これについては後述)。

宝暦7年(1757)、田村元雄物産会を江戸湯島に開いた。本邦物産会の始まり。

宝暦12年(1762)、平賀源内『物類品騰』6巻を編纂した。

寛政5年(1793)、田村元長『豆州諸島産物図説』7巻、八丈島の草類175種、木類67種、石類6種、虫魚類禽獸類52種、海藻類39種、海綿9種、鉄樹類20種、通計378種の物産を図説し、別に図外品222種の目録を記載した。

寛政7年(1795)、佐藤成裕会津侯の招聘に応じ、物産発起の事に任じ、『温古斎葎志』2巻、『温古斎附子弁』1巻、『金薯録』1巻を著し、人参、附子、甘薯の来歴、植法、製法、効用等を論述した。

寛政9年(1797)、宇田川槐園訳『遠西草木略』上下2冊完成した。藤元良『和蘭産物図考』5巻を作る。

寛政11年(1799)、薮閑月『山海名産図会』5巻を作り、海内諸邦の名産の産出の状況、製法、来歴を図説した。幕府侍医兼薬園統管渋江長伯は蝦夷地採薬の命を受け、旅行記『東遊紀勝』13巻、『蝦夷草木図』若干巻を、随行の谷元旦は『東蝦夷物産誌』1巻を作った。信濃伊奈都 市岡智寛『信陽菌譜』1巻を作り菌類凡そ70種を図説した。

享和2年(1802)、桂川甫周、幕府の命を受けて『顕微鏡用法』を述べた。

享和3年(1803)、中島真兵衛清香『舶来諸産解説70条』を著し、舶来産物の漢名、和蘭名、羅丁名を考証し、来歴、形状、効用等を解説した。

文化2年(1805), 江漢司馬俊『和蘭通舶』2巻を印刷し, 万国の地理産物の大勢を記述した。

文化3年(1806), 曾占春『海内方物紀略』1巻を著し, 海内諸国著名の物産を列挙した。

文化6年(1809), 渋江長伯幕府に要求してショメールという紅毛工業字書を購入し, 阿蘭陀通事馬場作十郎をしてその中の西洋硝子吹方を和訳せしめ, 『西洋硝子製法書』3冊を作った。

文化8年(1811), 紀州小原良貴『南紀土産考』別録10余巻を作る。また『紀州風土記』を撰した。

文化10年(1813), 大原東野『五畿内産物図会』を作る。

文化12年(1815), 『遠西鐸度涅烏私物品考名疎』1巻が完成した。この書物はドドニウス本草に所載の草木中, 和漢名をあてるべきもの670余種を選んで, 小野蘭山の鑑定をたのんでこれを編纂したものである。

文政7年(1824), 岩崎常正『武江産物志』1巻および同付録1張を作る。江戸近郊所産の野菜, 果物, 蕈類, 薬草木類, 名木類, 虫類, 魚, 獣類を記載してある。シーボルト 学徒を集め毎週1回博物学および医学の講義を授けた。

文政12年(1829), 伊藤圭介『泰西本草名疎』2巻, 附録1巻を作った。

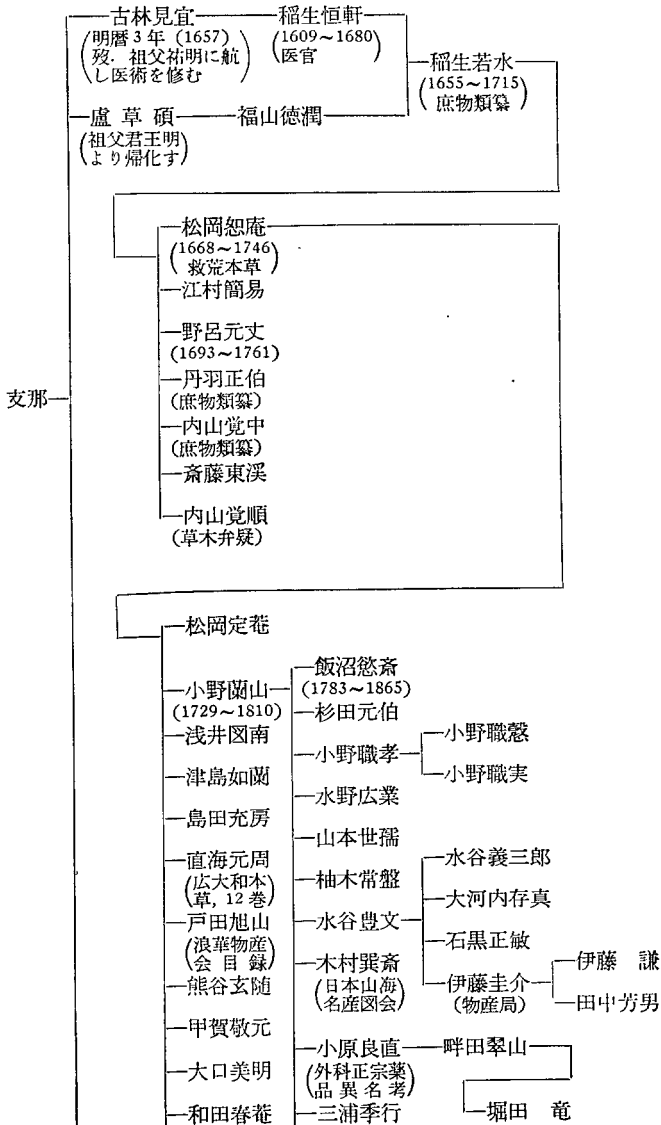
以上, 白井『博物学年表』より諸事蹟を選んで列記したが, これを辿ることによって, 徳川藩幕体制の中で, 本草, 名物, 物産の研究が漸次発達してきたことが理解されよう。物産学に関していえば, 物産会の開催および物産会所設立²⁾はいずれも関係深く, 物産学の発達に一層貢献したことであろう。物産会とは薬品会あるいは産物会とも呼ばれ, 山海の土産諸物を広く集めて陳列し, 一般諸人に参観を許したのもあった。また物産会所とは, 江戸中期以降各藩では財政窮乏を解決する有力な手段として専売制度を実施したが, この専売制度の実際の運営機関が物産会所である。物産会所は初めは藩役人だけで構成され運営された場合もあったが, 後になると藩役人の監督のもとに主

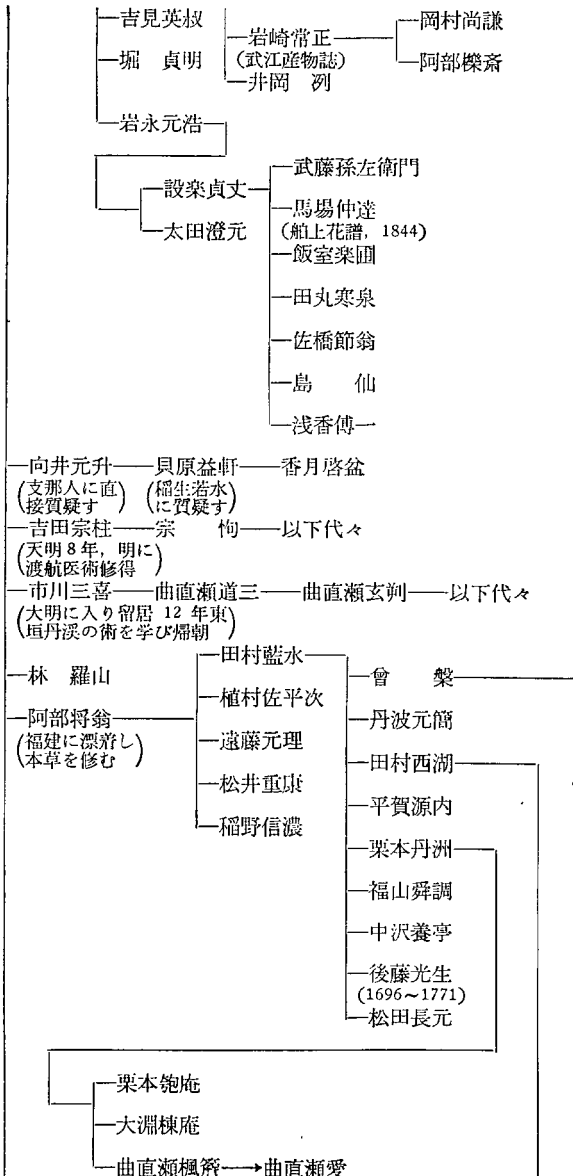
として城下町の有力な商人が実際に会所の運営に当たった。会所の業務内容は当初に於ては、いわゆる国産奨励的政策がその中心であった。技術の移植、技術上の指導、生産資金と原料の貸付あるいは領内産業保護のため他領商品の輸入禁止などが会所によって実施された。しかし次第に領内に生産が発展してくると、専売商品は塩、ろう、米などの生活必需品から生糸、絹織物、といったぜいたくな商品に切り換えられ、その一手買占機関に転化してきた。そして同一商品の生産が各地で行なわれてくると、市場をめぐる売捌き競争も激化し、これに勝つため生産量の増加、品質の良否が決定的な意味を持ち、したがって会所は常にこれらの点に十分の注意を払う必要があった。

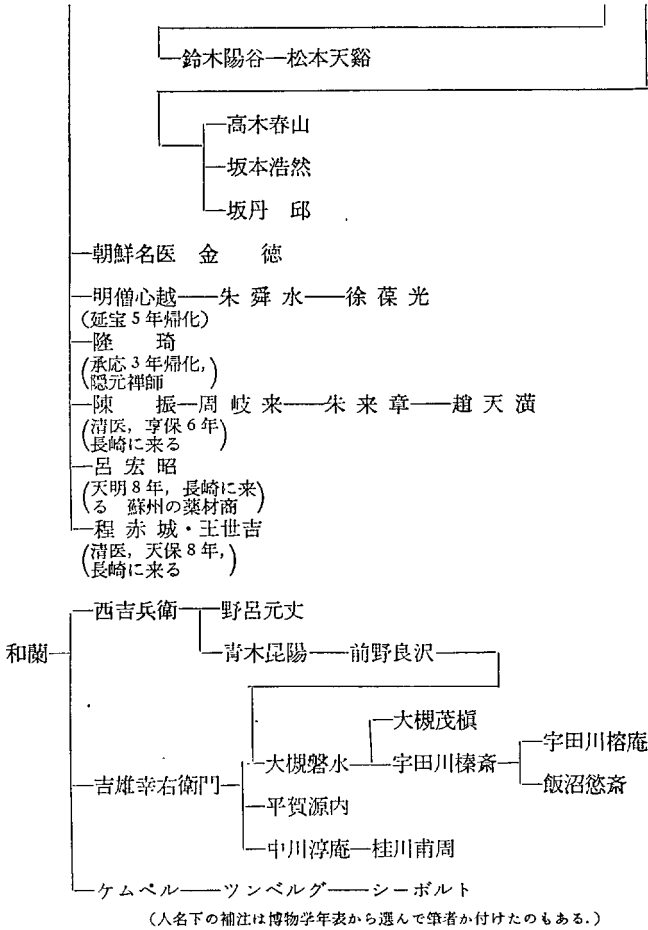
なお、幕末の物産学、物産局については次のような事蹟³⁾を知っておく必要もある。幕府は外国船渡来を機に外交処理のため洋学所を設立し(1855)、後にこれは蕃書調所と改名され(1856)、軍事調査、軍事技術の開拓と殖産興業の推進を直接の目的として活動する。ここでは富国のため物産学が学課であり、物産局長は尾張蘭学、本草学の長老伊藤圭介であった。この官体制が明治新政府に移行して行くのである。

以下、個別対象書籍に立入るに先だち、第二期応用博物学時代の沿革の大略を知る上で、この期に輩出した各博物家の系譜⁴⁾は理解を深めるのに役立つので年表から引用しておく。各時代の著名な本草家として知られた人々であろうが、必ずしも立派な著作を残したとは限らないようである。それは例えば直海元周『広大和本草』に関して、白井氏は年表中で次のように記しているからである。「此書の如きは名を『大和本草』の増訂に仮るといえども、実は荒誕無稽の臆説を妄作したるものにして、漢名、和名、引用書名等は大抵皆偽作にして真に其实あるに非ず。故に學術上には毫も参考の価値なきものにして、天下後世を誤まるの罪少少に非ず。」

第二期 博物家伝統図







1) 宮本高明; 薬 (岩波新書), p. 34. 資料出所が明示されてないが, 次のような記述がある. 紀元前 30 年ごろ, 本草なる語が記録に見える. ……本草はいわば博物学に当るもので物産に関する記載であり……わが国では紀元 623 年恵日という薬師すなわち当時の医療担当者であった僧侶として中国留学生であった彼が医方と本草書を持ち帰ったといわれる. これも恵日一人のするところでなく, 当時の留学生あるいは外交官たちが盛んに中国の医療や薬に関する資料を紹介, 導入したことを物語るものと考えられる.

- 2) 吉永 昭; 世界大百科事典 25.
- 3) 武田楠雄; 維新と科学, 第7話.
- 4) 蘭学系統では, 加藤文三; 「学問の花ひらいて」p. 73 および杉本つとむ訳; 「蘭学事始」, p. 179~180 にもある.

4 大和本草

1~16 卷, 宝永6年(1709), 皇都書林 永田調兵衛. 附録巻の1および2, 1冊. 諸品図3, 4, 5の各3冊. 正徳5年, 京師書林 永田調兵衛. 一橋大学図書館所蔵.

大和本草についての解説は既にあるが, ここでは原典に直接依拠して概説しておこう. 巻の1および巻の2は総論である. 巻の1では初め大和本草叙を門人笹原が記している. 次に大倭本草自序(ここでは大和でなく大倭と記してある)を益軒が漢文で記している. 書き下してみると次のようである.

天地の道常に行われて息まず, 而して天地別に為す所なし. ただ生物を以て事と為すのみ. 万物生生窮まらざる所以なり. これを以て六合の内, 産する所の品物浩穰にて究め尽すべからず. その民用と為るものまた弘く多く限りなし. 然らば則ち学者は明らかに諸物を知るのわざまたあに広博ならずべきや. 古人云う有り, 宇宙の内の事, 皆な吾が儒分内の事と. けだし経は道を載せ, 史は事を記す. その次に物を集めるの書また無くべからず. これ本草既諸載籍の関わるべからざる所以なり. かつ本草の学は民生日用に切なりとなす所以のものはまた故ある也. 品物の良毒, 誠に測り知り難く, 衆人の用捨また慎んで扱ふべし. ただ多くその名を識るのみにあらず, 然して則ち物理の学はその関係また小と為すべからざるなり. それ思うに古昔聖人の物を開くを務と成すのわざもとより至れり. 大なる哉. 然して天下の事物日に開けてやまず. 故に古へ無き所に而して今有り, 古へ知らざる所, 今知るもの枚記すべからず. その用をなすまた廃棄すべからず. 華夷各の有無を異にし, 南北互に宜忌あり. 故に物理を記載のわざ, 後世に到って漸次時に随って無くべからざるなり. これ古来諸家本草の述

作世に出でて、一時に止まざる所以なり。不佞、幼より多病、好んで本草を読み物理の学に志すこと久し。講余の日を以て粗く本草の要言を纂録し、かつ群籍の中に於て本草に載らざる品物を采輯し、また本邦に有りても本草群書の収めざる所を摺摭し、錯雑これを記載する。まま加うるに旧聞臆見とを以てす。彼是相ふえんの凡そ 1,360 余種に近づく。門を分ち類を設けておさめて 10 有 6 巻となりたばねて 1 書となす。これを名づくるに大倭本草を以てす。ああ、宇内の広闊、華夷の産する所の群品の蕃殖なるその数おしはかれず。蠡測の末学、徒に望洋の嘆を起すのみ。余玄磨の材、粗浅の学、聞見寡陋、博く引旁、総く精を研し、詳を致す能わず。古人の鑿に効ひ姑く見聞の及ぶ所に随ってその端末を記すのみ。その欠誤多く後人の譏誚を免れず。然れどもよわひ毫釐に向ひ桑榆既に薄れり。多年を待つて逐旋修改する能わず。以て遺憾となす。僭率の罪逃げる所なし。然れども粗より精に入り、狭より博に至るもまた学の万の一を少しく補う有るにちかからん。もし博洽の君子、その欠略を補益しその訛謬を改正すれば則ち予がこれ誠に願う所なり。

益軒の朱子学を十分理解することも無く、この自序を解釈することは甚だ無謀であるがなお大和本草執筆の思想は感知することができる。即ち宇宙には品物が多い。これまでに経書では道徳を、史書は事件を記してきたので次には物について記載する書物が必要である。本草学は民生日用に切実な関係があるが、品物の良毒は鑑定しがたいから乱用してはいけない。また名を識るだけでなく、物理にも通じなくてはならぬ、といったようなことである。そして開物の思想が強くくみ取れるのであるが、これは後述しよう。

さて、大和本草全巻の構成を見るため、目録を記してみよう。

巻の 1, 序, 凡例 論本草書, 論物理.

巻の 2, 論用薬 節飲食 数目類.

巻の 3, 水類 12 種 火類 10 種 金玉土石 67 種.

巻の 4, 穀類 26 種 造醸類 29 種

巻の 5 草の 1 菜蔬類 67 種

巻の6草の2 葉類 79種 民用類 7種

巻の7草の3 花草 73種 園草 18種

巻の8草の4 蕨類 9種 蔓草 37種 芳草 16種 水草 36種
海草 28種

巻の9草の5 雑草 137種 菌類 25種 竹類 22種

巻の10木の上 四木類 7種 果木類 44種

巻の11木の中 葉木類 32種 園木 36種

巻の12木の下 花木 40種 雑木 92種

巻の13魚 河魚 39種 海魚 83種

巻の14虫 水虫 20種 陸虫 64種 介類 54種

巻の15水鳥 25種 山鳥 13種 小鳥 36種 家禽 4種 雑禽
10種 異邦禽 10種

巻の16獣 46種 人類 10種

以上通計 1,362種、本草綱目から 772種を選び、他書から 203種、本草およびその他の書に載っていない和品 358種、蛮種 29種である。一例として巻の14の水虫の部の20種を原文のまま列記してみよう。ここには魚類、介類、昆虫類が含まれ当時の博物学知識がわかる。海參(なまこ) 蝦(えび) 海鰻(いせえび) 蝦姑(しゃこ) 苗蝦(あみ) 海鹿 ホヤ 石蠶(せむし) 海燕 水蛭(ひる) 水蝨(たがめ) 蜎足(マトヒ¹⁾) 水黽(しほうり) 豉蟲(まひまひむし) 海馬 蟹 龍盤魚(いもり) 孑孓蟲(ぼうふりむし) 龍骨

凡例では13件を掲げている。その幾つかを記すと、本草綱目に載っている諸説の中で最も大切なものだけ選んで収録した、漢文を用いずに国字(かな)で書いたのは、自分の漢文がよくなって文理をなさない、そのため人が理解しにくいのではないかということなどである。また向井元升、稻生若水等の大家の著した本草書から説を採るものが多いが、凡其他人の論説を奪て自己の説として他人の功を窃むのは小人の仕業であるといったことも記している。

本草の書を論ずる章では、本草の言語的考察から始まり、本邦本草学の歴史が語られ²⁾、また本草学修業上の要諦などが記される。極く

概略を記しておこう。

草木禽獣虫魚金玉石等を記した書は神農本草が始まりである。これには 365 種³⁾の薬物がある。これが本経である。梁の陶弘景名医は別録を作り神農本経を増補した。これにまた 365 種ある。以後歴代の名医が増補していった。明の李時珍は歴代の本草を選び輯め自己の見聞を加えて本草綱目を作った。載る所の品数は凡そ 1,892 種である。

蜀の韓保昇がいうには薬には玉石草木虫獣があるが、それを本草というのは諸薬の中で草類が最も多いためである。また本草という名前は前漢の平帝紀および楼護伝に初めてでてくる。

本草研究者の守る要諦として次のように云う。凡そ此の学を為す人は博学該洽、多く聞き、多く見て、疑殆を闕き、彼是を参考し是非を分弁すること精詳ならずんば的実なるを得べからず。偏に自己の聞見する所以を是と為し、人の己に異とするを以て非と為し固く執り錯り認むべからず太凡聞見寡陋なると妄に聞見を信ずると偏に己が説を執ると軽卒に決定すると此四の者は必誤あり。

彼の科学方法論は今日でも誤まっではない。次に彼の分類法であるが、本草綱目⁴⁾には品類を分類するのに疑わしい点が多い、といって色々の具体例をあげてから、自己の特有の分類に従ったということを書いて記している。そして文末再び研究者の心得を強調するという。凡そ博物の学は広覧強記の識、以て古今に通洽し、審問精思の勞以て衆物を考驗するに有らざれば、能く其の品物を究め、その性理に通じその是非を考へその註誤を正し、その真偽を分ち、その同異を弁へて而して広博を極め、精密を致す能はず。斯書の録す所の者は猶ほ蠡を以て海を測り、管を以て天を窺うごとし、と。

物理を論ずる章では、開闢の初は未だ人類有らず、人生の初は形化無く、氣化より生ず。万物の初生皆然り、氣化とは天地の氣交て自然に人物を生ずるを云う、といった書きだして朱子学の方法論「格物窮理」が説かれる。

巻の 2 は 46 頁総てを用薬を論ずるにあてている。ここでは薬には諸性質があり、用法上禁忌があること、用薬上の諸説諸例は本草書に記

載されているので熟覧すべきであるというようなことなどが先づ述べられ、薬草の採取、煎薬、服薬、調剤、飲食上の諸注意が諸本草書を引用して記しているが、医術論もある。現代に照らして多小興味もあるので引用してみる。医は民の司命なり。生命の繋る所、大事の職なり。その人を扱ふべし。才力すぐれ道理に精明なる人に非ずんば医と為すべからず。生業の為とて不才無知の人を医とするは人を害ふ也。……今の医と為す者先輩名医の作る所の国字(かな)の方書をよみ覚えて事足れりと思ひ本草内経以下中華の医書は煩ければ読まず。日本の医の下手多く良医まれなる故は近世国字の医書多く出てそれを専ら読んで事足れりと思ひ中夏の医書を学ばざれば也。

以上総論の部、巻 1, 2 を概説した。本書の記述が客観的説明に止まらず、道徳的見地よりする価値論や警世の言に及んでいることは上述の内容でわかることであるが、これについては、次のようにいわれている⁵⁾。朱子学に於る窮理は①道徳的・形而上学的な理と、②自然法則的な理とを内包し、己れに切な前者をより重視したのが朱子であったが、益軒に於ては彼自身の性格や元禄前後の社会思潮を鋭敏に感受してむしろ後者の理へと目ざしていたといえようが、①の場合が登場しているのである、と。軽輩といえどもなお武士階級の指導意識の発露があるのでなかろうか。

さて、巻の3からは各個別に入るのであるが、巻の3の水類では温泉も記載され、湯治の法および禁忌が記されている。また水晶については、これを用いて太陽光をもぐさに点火すること、眼鏡はオランダからくる硝子(ピイドロ)を用いるが、日本では水晶を使用する。そして老人の昏眊を助ける日用の重要な品物である、といったことなど記され、また梅のところでは梅干の製法、魚類のところでは肉糕(かまぼこ)およびその製法などもある。これからみても天産物以外の人工物も取上げていて、開物の思想があふれているのを知るのである。

1) 原文、水中ニアリ水中ヲ泳ク大サ燈心草ノ如ク其長キ事六尺余或丈余其首魚ノ如ク又ヘビニ似テ小ナリ堅シ人ノ足ヲマトヘバ皮肉切レルト云。実

在の動物ではないのでなかろうか。

2) 本草の語の起原研究は中尾万三；葉窓，第46号附録，昭和3年12月刊行「漢書芸文志より本草衍義に至る本草書目の考察」の中で詳細に考証されているという。日本思想史大系 63，近世科学思想 下 p. 428—429。

3) 365 の数はいうまでもなく1年365日に対応するもので，古代の医薬にひそむ呪術的性格の反映である（吉田光邦；江戸の科学者たち，p. 39）。

4) 時珍の『本草綱目』はまずその分類においてすでに革命的だった。彼は伝統的な上，中，下の3分類や玉，石，草，木など十分に分ける方法をとらなかった。全体は16部60類，1,892種の薬物をおさめた。それはまったく独創であり新風だった。分類は水，火，土，金石から禽，獸，人などとされて，時珍は敢然と伝統を否定した。水火は万物に先だつものとしてトップに置かれた。土は万物の母としてやはり最初の方にある。植物は草，穀，菜，果，木と小から大にならべられ，虫，鱗，介から人に至る動物は賤から貴へのならべ方であると時珍はいつている（吉田光邦；江戸の科学者たち，p. 39~40）。

5) 井上忠；日本思想大系 34 貝原益軒，室鳩巢，p. 492~504。

5 物類品隲

平賀源内著 宝暦13年，6巻 松籟館蔵版，一橋大学図書館蔵書
巻の1の最初は明和2年（1765）紅毛談2巻を著し，和蘭の国土，風俗，産物等の概略を記した本草家後藤光生の序文，次いで，既に記したことであるが本邦最初の物産会開催者である田村元雄（藍水）の序文，そして次に平賀による凡例が漢文で書かれている。この凡例により本書の成立由来を記すと次のようである。

薬物を持ちよる会合は田村先生が宝暦7年に江戸湯嶋で始めたのが最初であるが，翌年は神田で開いた。9年には平賀が引継いで湯嶋で開催した。10年には社友の松田が市谷で開き，12年には平賀がまた湯嶋で開いた。集まる品物は，草木鳥獸魚介昆虫金玉土石，和漢蚕種を撰ばなかった。主催者の出品物を主品とし，同好者の出品物を客品とした。主品は毎回100種を限度としたが，最初の2回は皆田村先生の庭園中のものであった。その後の3回も主品の半は先生の援助するものであった。宝暦7年から10年に涉つての出品物は700数10種を過ぎなかった。12年の会は国内の同志に広告し，1,300余種の品物

が集まった。そこでこれまで4回の品物と合して2,000余種になり、中国、西洋の品物が大いに備わった。そこで、その中から正体の確定しているもの、珍しいものなどを選んで、この書を編纂するのである。さて、東壁(李時珍、筆者注)の本草綱目には分類の仕方、草部に木類が入っていたり、竹類が木部に入っているといった誤謬もあるが、他の諸本草書と比べれば、大層優れて博該であるし、学者はまたよくこれになじんでいる。そこで、この本草綱目を基準にして、部に分けて物品を列記するようにするが、出品物は皆上中下の三等に格付けする。これがこの書の命名の所以である。ところで、天産物の諸性質は外的条件の影響を受けることが多いから、個物の上下を以て、その類全体を判定するのは危険である。ここに記してある品等の判定は、当時集まった品物についてだけのことであるから、読者はこの点理解する必要がある。また図絵の一覧は千百言を費して説明するより勝っている。そこで珍品36種をあつめ図絵1巻とした。また人参、甘蔗は国益の大きい品物であるから、それぞれの培養、製造法を記して附録1巻とした。

以上によって『物類品騰』刊行の次第はよくわかるのであるが、物産会というものは、当時このほかにも別人によって開かれ、物産書が著わされていたのを、白井『博物学年表』から選んで記しておこう。宝暦8年(1758)、『採薬使記』完成した。此書は享保中、阿部友之進、松井玄蕃重康の2人が幕命を奉じて諸州に採薬の時、発見した物品の解説であって両人の口授を高大醇が筆録したものである。同じく宝暦8年には熊本藩再春館に於て薬品会が開かれている。宝暦10年には大阪の医家戸田旭山が物産会を大阪浄安精舎に開き、『文会録』を作っている。宝暦11年には同じく戸田旭山が物産会を大阪に開き、『浪華物産会目録』1巻を作っている。これは半紙本、図入、20頁である。同年、周防の医家豊田養慶は京都東山雙林寺に物産会を開き、『赫鞭余録』を著わしている。

さて、巻の1に記されている総目録を次に記しておこう。

巻の1 水部 薔薇露 土部 白堊 烏古瓦 墨 釜臍墨 百草霜

石鹼 金部 金 砂金 金礦 銀 銀鑛 赤銅 假鑛石 自然銅
 銻石 銅鑛石 銅青 粉錫 密陀僧 古文錢 玉部 珊瑚 海松
 馬腦 寶石 水精雲母 雲膽 雲砂 白石英 黑石英 紫石英

卷の 2 石部 丹砂 水銀 水銀粉 粉霜銀朱 雄黃 雌黃 石腎
 理石 長石 方解石 滑石 冷滑石 斑石 松石 白石脂 黃口脂
 赤石脂 爐甘石 無名異 畫燒青 石鍾乳 孔公孽 殷孽 石牀
 石花 土殷孽 石髓 地脂 石腦油 石炭 石灰 水龍骨 石麩
 暈石 石芝 慈石 玄石 代赭石 禹餘糧 太一餘糧 空青 會青
 鑛石 綠青 扁青 佛頭青 ベレインブラウ 石膽 礞石 花乳石
 金牙石 銀牙石 金剛石 石弩 薑石 石蟹 石蛇 石蠶 食鹽
 戎鹽 光明鹽 鹵鹹 凝水石 綠鹽 鹽藥 水消 火消 礪砂 蓬砂
 石硫黃 水硫黃 礬石 綠礬 黃礬 石柏 石梅 試金石 化石
 カナノオル ロートアールド ポットロート コオルド

ペレシピタアト ヒツテリヨウルアルビイ

卷の 3 草部 甘草 黃耆 人參 沙參 羊乳 薺苳 桔梗 黃精
 萎蕤 知母 肉蓯蓉 列當 赤箭天麻 白朮 蒼朮 巴戟天 百脉根
 淫羊藿 仙茅 玄參 地榆 紫草 三七 黃連 黃芩 秦艽 防風
 延胡索 貝母 山慈姑 細辛 釵子股 白芷 補骨脂 鬱金 蓬莪茂
 茉莉 薄荷 石薄荷 艾 角蒿 泊夫藍 胡盧巴 麻黃 地黃
 麥門冬 鴨跖草 欵冬 決明 車前 馬鞭草 鼠尾草藍 海根 蒺藜
 地楊梅 紫花地丁 見腫消大黃 茵茹 草茵茹 大戟 澤漆 甘遂
 續隨子 萹蓄 常山 臭梧桐 土常山 藜蘆 大藜蘆 附子 烏頭
 白附子 由跋 半夏 芫花 醉魚草 莽草 茵芋 五味子 使君子
 牽牛子 天茄子 旋花 藤長苗 牆蘼 木香花 栝樓 王瓜 天門冬

百部 野天門冬 何首烏 草薺 菝葜 土茯苓 白薇 山豆根
 釣藤 忍冬 南藤 紫藤 香蒲 萍蓬草 沙筲 石帆 石斛 麥斛
 骨碎補 卷柏 地柏 含生草 玉柏 石松 百草灰 胡堇草 天芥菜
 霸王樹 霸王鞭 金絲桃 金絲梅 平地木 水木犀 ローズマレイン

ケルフル イケマ

卷の 4 穀部 稻 粳 早稻 秈 薏苡仁 粳糲 罌子粟 綠豆

豌豆 菜部 葱 樓葱 菘 蕪菁 萊菔 生薑 邪蒿 恭菜 高苳
 蒲公英 百合 茄 冬瓜 絲瓜 苦瓜 番椒 果部 木瓜 胡桃 橄欖
 阿勃勒 羅望子 吳茱萸 茗 臯蔴 甜瓜 瓜蒂 西瓜 甘蔗 木
 部 杉 桂 烏藥 楓樹 質汗 篤耨香 膽八香 盧會 檉木 棟
 秦皮 皂莢 肥皂莢 櫻櫚 相思子 枳 枸橘 酸棗 蕤核樹 山茶莢
 女貞 水蠟樹 枸杞 牡荊 紫荊 紫珠 扶桑 蠟梅 虎刺 木綿
 海桐花 多羅 琥珀 璧 雷丸 筴竹 苦竹 淡竹 鳳尾竹 方竹
 竹黃 キヨルコ サツサフラス エブリコ ルザラシ 蟲部 蟲白蠟
 紫鉚 石蠶 斑蝥 芫青 螫 衣魚 蝸牛 鱗部 龍骨 龍齒
 龍角 紫稍花 鼈龍 蛤蚧 蚺蛇骨 鱧魚 魚虎 海馬 介部
 蠍龜 瑤瑁 牡蠣 蚌 馬刀 蜆 石決明 鮫魚 貝子 紫貝 海鏡
 壁虎魚 獸部 水鼠 鼯鼠 香鼠

卷の5 圖繪 甘草 朝鮮種人參4圖 漢種黃精 肉苳蓉 赤箭天麻
 巴戟天 仙茅 漢種延胡索2種 漢種細辛 漢種補骨脂 琉球產茉莉
 泊夫藍 漢種菌茹 蝦夷種附子 漢種使君子 琉球種天茄子
 漢產木香花 漢種百部3種 山豆根 漢產楓樹 膽八樹 漢種橄欖2
 圖 臺州種烏藥 漢種蕤核樹 漢種檀香梅 蠻種木綿樹 蠻產木綿殼
 漢產鱧魚 蠻產蝥 鼯鼠 蠻產鼈龍 蠻產蛤蚧 石芝

卷の6 附錄 人參培養法 甘蔗培養并製造法

以上総目録を閲覽して、ここには多数のかたかな文字の物品名が出現してくることに気付くのである。卷の1は田村藍水監定、平賀源内編輯、田村善之、中川鱗および青山茂恂同校である。先ず初めが水部で薔薇露についての解説である。その1部を引用してみよう。「……然レドモ其ノ製法精カラザレバ水腐テ久ニ堪ヘズ。製スル時サルアルモニマアカヲ少許リ納レバ水数十年ヲ経テモ損セズ。……是ヲ蓄フル法フラスコニ納テキヨルコヲ口ニシテ紙ニテ封シ置ベシキヨルコナキ時ハ蠟ニテ密封スベシ。サルアルモニマアカキヨルコノ事各条ニ詳ナリ。」

さて、平賀源内については大家により、「非常の人」としての解説がある¹⁾ので、これらを参考に『物類品隲』の商品学史上の意義をさ

ぐってみよう。さて、司馬江漢は源内と交際があった。彼の著書『春波楼筆記』には、「源内はまたオランダ渡りの珍品奇器を好んだ。当時はまだ蘭学者も少なく、杉田玄白・中川淳庵ぐらいいし知られていなかった。源内はヨンスターンという1冊5,60両もする蘭書を、家財夜具までも売りはらって買いもとめたりした。」といった記事がある。源内は『物類品隲』刊行前(宝暦2~3年)に既に長崎に本草学研究のため出掛けていた。そこで『物類品隲』編輯上蘭学が影響しているのは当然のことである。刊行の次第は先に源内の凡例によってわかっているのであるが、物産会が如何なる意図をもって開催されたか、物産会の引札から引用してみれば、「此の会の主意は、只今まで漢渡りのみにて我国になき品も、深山幽谷尋ね求む時は又なきにしもあらず。しかはあれど道遠き国々を一々尋ねんとするも煩はしく、又ことごとく至るべきにもあらざれば、其の国々の人にたよりにて産する処のものを得て是れを考へる時は諸本草並びにどどにゆうす『ころいとぼつく』といへる阿蘭陀の本草等に出づるところ、大体は外国より渡らずとも日本産物にて事足りなん……」とあり、その意図もよく理解される。彼の著書放屁論後編は安永6年の作であるので、『物類品隲』に後れること10数年であるから、この書物中の記述を引用して、『物類品隲』刊行当時の源内の思想を推論するのは当を得ないかも知れないが、なお幾分かは臆測できるであろう。引用してみよう。「春さきのアンコウと太平の世の武士は、その値段がしだいに下がり、みなからは工農商の三民に養われる税泥棒のように思われている。……先祖が一番のりをつねに心がけて馬の前を進んで歩き、国家の基礎を磐石のものにしようとして心を砕くべき忠臣でも、いまではソロバンをはじいて勘定があわず、……お出入りの商人にまで金まわりが悪いため軽くあしらわれ……それにつけても金のほしさよ。……ところで彼はこうして暇なのをさいわいに、いろいろと工夫をこらして、なんとか日本の金銀がシナやオランダに持ってゆかれぬように、その一助にもなれかしと、思はなくともいいことに心を痛め、すこしは国恩に報いたいというのだが、……それぞれがそれぞれの立場によってちがっ

た了簡を持つわけでしょう。わたしは綿羊を見れば日本でラシヤ、ラセイタ、ゴロフクレン、ジョン、トロメン、ヘルヘトアン、サルゼそれに毛氈(せん)類の毛織物を織らせ、外国からの輸入品を待たずに、日本でそれらを産出し需要にあてたいと心を砕くのですが、人は見世物にでもして簡単に金をかせぐことばかりを考えてる仕末です。」以上長々と引用したが、金のほしさよという嘆声には既に現代人の嘆声と同一のものを感じる。そして時の権力である幕府の殖産興業政策乗の意図もあったであろうが、益軒以来の開物思想が物産学のしんとなつて流れているとみてよいのでないか。このような思想のもとでつくられた『物類品隲』は、ルネサンス期フランドルの大植物学者、ドドネウスの、源内呼んでいわゆる『紅毛本草』をモデルにしたもので、同時代ヨーロッパで流行していた物産の「カタログ・レゾンネ」(解説目録)であるといわれる。これには中国的な本草の知識に加えて西洋の博物学の影響が顕著に入ってきているのである。

『大和本草』は開物思想、人間の役に立つ使用価値の開発精神があつて、金銭に絡んだ考えは発現してこない。しかし、『物類品隲』や後述する『名物図会』などからは、金の世の中に生き儲金思想、商的思想が十分にでてくるのである。この意味に於て商品学史上本書のもつ意義は重要であることを再考すべきである。なお、源内の物産書を次に記しておこう。

紀州物産志 宝暦 12 年 (1762)、火浣布説 宝暦 14 年、火浣布略説 明和 2 年 (1765)、陶器工夫書 明和 7 年。

1) 芳賀 徹; 日本の名著 22 杉田玄白 平賀源内 司馬江漢 吉田光邦; 江戸の科学者たち。

6 日本山海名物図会

寛政 9 年 平瀬徹斎撰、画工 松翠軒長谷川光信 5 卷、浪華書林。一橋大学図書館蔵書。

これまでの『大和本草』および『物類品隲』が一橋大学の前身である東京高等商業学校時代の図書分類で理科つまり自然科学に入ってい

たのに対し、これから取上げる『名物図会』¹⁾および『名産図会』は分類項目が地理物産類となっていることを附記しておこう。

先に白井『博物学年表』を引用して宝暦4年に平瀬徹齋が『名物図会』を著した、と記したが、刊行されたのは43年後の寛政9年である。この次第は巻の1の徹齋の子息平瀬光雪の跋を見るとわかる。『名物図会』『名産図会』については既に千葉徳爾氏の注解書²⁾があるのでこれも参考にした。なお、本書については別に、「比較商品学書論考——ヨハン・ベックマンと平瀬徹齋——」として発表したの³⁾、此所ではその発表に洩れたものを取上げておく。光雪の跋文は、「俳人許六が曰く、末の代にあって和歌の道に対するものは金銀なり。目に見えぬ鬼神をなかしめ、おとおんなの中をやわらげ、たけきものふの心をなぐさむるものは是なりと⁴⁾。誠に是にくまるる者は、此界に一日の逗留も成がたし。」と先ず始まる。ここで筆者はまた資本論の一節を想起する。「商品流通の拡大とともに、貨幣——いつでも使える・絶对的に社会的な・形態の富——の力が増大する。『金は驚歎すべき物である！ それを有する人は、彼の望むすべてのものの主人である。金をもってすれば、靈魂を天国に行かせることもできる。』（コロンブス、ジャマイカからの書簡、1503年。）……『黄金？ 黄色い、ぎらぎらする、貴重な黄金じゃないか？……こいつが此ッ位ありや、黒も白に、醜も美に、邪も正に、賤も貴に、老も若に、怯も勇に変えることが出来る。……』（シェークスピア『アセンズのタイモン』第四幕第三場……）。」「以上、長谷部文雄訳、資本論、第一部上(1) p. 260~262]。つまり、おかね、交換価値のもつ腐敗性に関する万国共通性(貨幣の本質)をまざまざと示すのである。ところで、そのように貴重な金であるからという理由であろう、巻の1は総て金銀銅の採鋳冶金の絵入り解説である。さて再び跋に戻って「雷をえがくものは力士左に連鼓を携え、右に鞭をもって多くは豹虎の皮を特鼻禪に用ゆこと、王充が説に出、僧正坊の像は古法眼の着想に鼻の高き山僧を見しより始めりとぞ。絵空言とて信ぜられぬ事多し。今此図せる所の山海名物はさにあらず。諸国山川海浜の物産に世をいとなむるものを尋

もとめて、価を施して得たる所こそ現在の図なり。証とするに足れり。およそ人其職分の本を知らば、おのずから財宝を得るの便とならん。此書世のために益なしといわんや。……」とある。ここでは実証的精神、科学が、そして商品・職業教育精神も発現している。

本文の1部について記しておこう。南蛮鑪の記載文に次のような文言がある。「……金山の下財辛苦して宝をほり出しての世わたり、唯おのれが口を養うのみ。多分の利は皆金山司の徳用となれり。唐の羅陰が詩に以て百花を採り蜜と成す後、知らず辛苦は誰が為か甘からしむといえる蜂の身の上と同じかるべし。」ここには宝暦4年⁵⁾(1754)南蛮鑪という技術革新のもとでの直接生産活動に従事する賃銀労働者の労働苦、労使意識が尖鋭に表現されてきている。別子の銅精錬は元禄にはじまり、住友家がその特権的な請負人として活躍し、独特の南蛮吹きによる銅の精錬と取引とを基礎として、両替店の金銀銅取引や大名貸によって大をなして豪福となっていたのである⁶⁾。なお著者平瀬徹斎は大阪の町人学者であるがその詳しいことは不明である。

1) 経済地理書と見る人もいる(千葉徳爾: 注解日本山海名物・名産図会, p. 299)が、ここには商品学と地理学との共通した発達基礎を承認することができる内容を含んでいる。中村巧: 商品研究 12—3 (1961), p. 2.

2) 千葉徳爾: 前掲書, 社会思想社, 昭和45年。

3) 昭和49年度日本商品学会第25回年次大会

4) 紀貫之(平安朝の代表的歌人)の『古今集』の序に「猛き武士の心をも和らげ、目に見えぬ鬼神をも感ぜしむるは、ただ和歌の徳なり」という文言がある。(奈良本辰也・衣笠安喜: 近代日本の名著 1 江戸時代の思想, p. 234.) 許六はこの文言を利用したのである。

5) この年には久留米騒動が起き、200余村の百姓16万8千余人が参加している。野呂栄太郎: 日本資本主義発達史, p. 37.

6) 竹中靖一・川上雅: 日本商業史, p. 246.

7 日本山海名産図会

木村孔恭著, 鄙関月画, 5巻, 寛政11年(1799)発行, 浪華書林。一橋大学図書館蔵書。巻の1は山海名産図会序を著者の木村孔恭が漢文で書いている。もっとも、『日本山海名物図会』の巻の5の奥付に

この『名産図会』の次のような案内文があるので、『名物図会』の後編といった類であることはわかる。「此編にもたれる諸国の名物名産を集め、ことごとく図をあらわしくわしくその業を文にのべ海内の産物多きを知らしむ。」

さて序文に大略次のようなことが記されている。中古の人士の物産知識は、おおむね本草学に基づいていた。そして山海の物産知識も遺漏なく記されている。向井観水(元升)、稲生若水、松怡、頑島、彭水等の才輩が多数いる。自分もこの流れに身を処して、数10年の苦心をはらって人のまだ見ない所を見、人のまだ知らないところを知ってきた。稲生若水は『採草独断』という書物を著わしたが、残念なことには世間に伝わっていない。自分はこの稲生若水にならって書物数巻を著し「名物独断」と名づけた。けれども原稿の完成直後火災などで生活困難をきわめた。たまたま、書店が画冊を携えて序文を書いてくれと来た。題名は「山海名産図会」とある。見ると、かつての自分の原稿のなかで、産地、種類、珍奇などに従って特に名声高いものを図で表わし、その製作法、考証などを図の後に加えて、婦女小児にでも理解できるようにしてある。画は亡友の関山である。そこで序文を書かないわけにはいかない。そこで、上述のような本書成立の次第を語ったのである。芥珀磁鉄などその本性は皆自然から発現している。強制はできない。天地の間には産物が多く、したがって博識たらざるを得ないが、その要諦は、重要な薬物から末端日常のささたる食品に至るまで、誤謬があってはいけないということである。

以上により、本書成立の由来は理解される。次に各巻の目録を記してみよう。(原文漢字のものにはふりがながしてあるが、省略し、特に読みにくい、あるいは読み誤り易いものには、そのふりがなを1部附記する)

巻の1、摂州伊丹酒造(さけづくり)。

巻の2、豊島(てしま)石、御影石、竜山(たつやま)石、砥礪、芝(さいわたけ)、日向香蕈(ひむろしいたけ)、熊野石耳(いわたけ)、蜂蜜、蜜蠟、会津蠟、山椒魚、吉野葛(くど)、山蛤(あかかえる)、鷹傘蓼蓼虫(ゑびづるのむし)、鷹羅(あみ)、鳧(かも)糞、予州峯越鳧、摂州霞

羅，無雙返，捕熊（くまをとる），陸弩（おしゆみ），洞中熊，以斧（おのもって）撃，試真偽（しんぎをこころむ），製偽胆（にせをせいす）。

巻の 3，伊勢鮫（あはひ），長鮑（のし），附 真珠，伊勢海鰻（えひ），丹後鰯，追網，立網 附他国鰯，平戸鮪 冬網，讃州鱒 流網，若狭鯛 同鰈并塩藏風乾，附 他国鯛，讃州榎股撥（えまたふり）網 同五智網，能登鯖 同他国釣舟，広島牡蠣 同畜養法 種類。

巻の 4，土佐堅魚，讃州海鼠 いろこ このわた，越前海胆，西宮白魚，桑名焼蛤，加茂川鮎（ごり），予州大洲石伏（おほづいしぶし），神道川鱒，諏訪湖八目鰻，明石章魚，滑川大梢魚（たこ），高砂望潮魚（いいたこ），河鹿。

巻の 5，備前水母（くらげ），近江石灰，伊万里陶器，越後織布，松前臍肭（おつとつ），昆布，唐船入津，阿蘭陀船。

さて，本文 巻の 2 の総論的叙述の石品（いしのしな）の中に，イタリヤおよび欧邏巴（ようろっば）などの文字が現れ，それに絡んだ事項が叙べられていることは著者が西洋事情に通じていたのを表わしている。石灰は化学工業製品であるが，これについての叙述を現代流になおして略記してみよう。

現在，近江，美濃の品物が上等である。それは，鉄分のない土地だからである。起原は和州芳野，高原で初めて焼いたが，その年月は不詳である。本邦ではその使用が甚だ古く，桓武天皇の大内裏造営に用いられている。そのほか人間の便益に役立てられている。舟やかきね，水を入れる器などすべてこれを利用して初めて可能なので，天下の至宝である。

現在，江州伊吹山近辺での製品原石は青石であるが，山州鞍馬の製品は夜色石で，青石に劣っている。石は土中 2，3 尺のところから掘取る。露出しているのは取らない。掘出して矢をもって打破り，てこ，ころ木で山からころげ落とすと砕けて地上に到着する。このとき砕けないものは良品でない。かきがらを焼いたのは石灰に劣っている。製法は窯の高さ 3 尺，直径 4 間程度，田の土でつくる。美濃の窯はこれと違って檜窯というものである。燃料には炭を使用する。焼成冷却後俵

につめて放置一年，自然風化させたのち市中に倉出しする。水に会うことは危険である。大阪で販売しているのはかきがらの灰で石灰品は尠い。灰の使用法，舟の縫合せの目を固めるには桐の油，魚油などと混合してつめ込む。その他用途は多い。天工開物も既に読まれていた時代であり，記述自体は特に珍しいことでないが，今日の商品学記述がここにもあったことは一応心に留めておこう。

さて、『名物図会』では鉱山の記事から始まり，農産物，水産物のほか，祭礼，行事，名所，俗信などが挙げられているが，この点で千葉氏は次のような見解を述べている。『名物図会』では名物の概念が整理されて明確なものとなっていなかった。つまり対象分類について方法が確立していなかった。そこで雑然とした印象を与えるのに反し，『名産図会』では対象分類も物産と交易に限定して，名所案内が切り捨てられている。そして新しく考証が加わるようになった¹⁾。そこで本文記述の順序は名義，発達過程などをまず考証し，次に名産地について生産技術と工程の概要，販売輸送の方式などを述べるといった具合である。

著者木村孔恭は前記した博物家伝統図の，木村異斎である。大阪の町人学者，『唐土名勝図会』『一角纂考』『銅器由来私考』『花譜』などの著書がある。益軒，源内などに比べて通俗的によく知られていないので，その列伝を略記しておく。

木村兼葭堂(1736~1802)，徳川中期の博物学者，元文元年生。幼名小太郎，初めの名は鶴，のち孔恭，字は世肅，号は異斎，遜斎，兼葭堂。通称は坪井屋吉右衛門(壺井屋太吉)。大阪北堀江に造酒業を営み家富む。博学多芸で詩文書画，篆刻等能くせざるはなく，特に物産の学に通じていた。幼にして狩野派の画を学び漢書を修め，また大雅堂に山水を学んだ。15，6歳で京に出で津島桂庵，小野蘭山について本草学を修めその蘊奥を究めた。また奇書珍籍，書画骨董を蒐集し，内外の奇玩珍品の所蔵多く交友海内に洽かった。享和2年正月25日没。年67。大正13年2月11日従五位を贈らる。大阪東区小橋寺町大応寺に葬る。大人名事典(平凡社)より。なお千葉徳爾：注解日

本山海名物・名産図会にも木村孔恭伝がある。

1) 諸国の名産を書いたものには、寛永 15 年 (1638) の俳書『毛吹草』がある (竹中靖一・川上雅: 日本商業史, p. 152). 商品学書に該当するかは内容を見なくては判らない. このほか、貞享 4 年 (1687) には藤田利兵衛『江戸鹿子』が刊行されている. これには諸職名匠, 諸商人の分布, 販売品の町別分布をはじめ問屋大概が載せられているので著名である (北島正元編著: 江戸商業と伊勢店, p. 68). また貞享元年 (1884) 刊行の衣笠一閑『界鑑』には名産物の刃物について来歴, 性能などについての記述がある (村松貞次郎: 大工道具の歴史, p. 199). このほか地方産業の沿革や生産組織について記したものは少なからずある (日本史籍論集 下, p. 213).

8 時代背景への理解

これまでに現代の商品学視点から、『大和本草』(1709), 『物類品隲』(1763), 『日本山海名物図会』(1797), 『日本山海名産図会』(1799) の 4 書を捉え, その内容の解明を試みた. これら以外にも商品学範疇に入る書籍のあることは、『博物学年表』中の事蹟からも推定できる.

さて, 学問は歴史的, 社会的な所産である. 歴史上商業のなかったところに科学の育った例は一つもないということがいわれている¹⁾. そこで上記 4 書を日本資本主義発達の過程の中に位置づけて, 理解の一助としよう.

野呂栄太郎『日本資本主義発達史』によって先ず, これらに該当する時代を概説すると, 鎌倉時代に一般的萌芽を発した手工業は, 室町時代の末期より徳川時代の初期にかけて, 中国およびヨーロッパの影響を受け, 生産用具や生産技術に幾多の進歩改善を経たが, 元禄時代以後に於ては, 殊に急速な進歩を遂げた. 手工業は徳川時代に於ける主要な生産様式であって, 政府の保護干渉を受け, ギルド的組合制度の下に営まれた. ところがこの組合制度は手工業生産力の増進, 農民の都市移入に依る手工労働の増加および商業資本家的家内工業の競争等によって, 徳川末期より次第にその封建的制限性は破られるようになった. 次に徳川時代に於ては新しい生産様式として絹および木綿織物の家内工業が発達したが, 特に中葉以降に於ては, 一方に於ける農

民の窮乏による副業の増加と、他方に於ける主要な生産様式との結果、次第に商業資本の支配の下に行なわれるようになった。なお、武士の貧窮と共に武士の内職として商業資本家の家内工業が厳格な身分制度の一廓を次第に蚕食していた。これは新しい時代の近いのを暗示している。上述した所は総て交互的な作用で相互補強しながら、封建制度変革の客観的ないし主観的条件の成熟を促した。殊に織田、豊臣を通じて徳川に入ると共に、次第に全国的に統一された交通路および貨幣制度の整備、農工生産力の増進等によって発展の新しい素地を得た商業は、市場金融投機等の諸経済組織の相対的発達と相俟って、貨幣に対する全支配権を商人の中に集中したのである。享保年間に入っては全国的な規模をもって商業社会ができ、商品需給の経済法則によって、価格が決定されるようになった。このような時代相の変化は前出4書の序文などから窺えた。

士農工商の身分社会に於て商品貨幣経済の進展は、百姓、町人の経済、政治闘争を果敢なものとし、元和、享保、天明と時代進展に従って一揆は増加してくる。これは封建制度の内存的矛盾の対立の爆発である。

風土記、地誌などで沿革、制度、人物、名勝などには多く記述するが物産に及ぶ記述が少ない理由は、身分社会では武士が物産や経済に心を勞するのは低く卑しい分野と考えられていたためであるともいわれ、この点、儒教に深く染まらない実利を追求した町人思想は、物産経済の面で深い造詣を示す人物を生んでいる。益軒、源内、徹斎、孔恭と並べるとき、官学的、市民的といった区別が現われている。儒者であり武士であった益軒の『大和本草』からは商的思想の発散は覚えない。ただあるのは、開物思想²⁾である。開物の思想は益軒に始まるといわれているが、これは人知によって自然界のうちから人間生活に必要なものを採取し、加工し実生活に役立たせることで、産業と経済の東洋的思想である。この思想は源内にも見られる。徹斎および孔恭の名物図会、名産図会にいたっては、鉾山の諸労働、酒造など、物品の製造が人間の生産活動の中に位置づけて捉えられている。多数の勤

労人民の生産活動こそあらゆる歴史的行為の基礎である。大阪の町人学者の所産，市民派的なものを感得できるのである。

- 1) 坂本賢三：一橋論叢，第 70 卷第 2 号，p. 13.
- 2) 三枝博音：世界大百科事典 5 (1955)，平凡社。

9 結

本邦商品学の源流を求めて歴史を遡上して，物産学，本草学を探ってみた。そして従来われわれが記述商品学といい，なお今日もそれを続けている形式および内容のものを次々と遙か前にさがし出すことができた。しかもそれは既に蘭学を導入していた。ところで，明治になって新しい博物学と薬物学が確立されて本草学の伝統が絶えた，といわれている。物産学もその軌を一つにしているのだろうか。明治以後ベックマンの商品学が本邦商品学創設上モデルになったのか，またどのような影響を与えたかなどは，一度厳密な検証を要するところである。このことは歴史の連続性を部分的に没却してしまい，無批判にベックマンは商品学の始祖であると信じてしまうことに連る。明治以降の西洋学問を受入れる素地は十分にできあがっていたのである。

使用価値の探究は凡そ人類の発生と同時にあった。なぜかなればこの探究が無かったなら人類の生存，発展は維持できなかったからである。そして物に対する知識は集積されていった。本草学学習の要諦が博覧強記，多識であった。これは古い時代の科学が知識と同義であるといわれる所以をよく示している。

さて，商品学の源流を生薬学に置かずに商取引学に求めたのは，商学の一分科であるという前提意識から，商品学の特質を見失わないようにとの配慮であろう。物産記述の歴史は古いが，このような考慮に立てば『物類品鑑』はさしずめ本邦商品学書としての第一に立つ 1 つであろう。それは使用価値認識の歴史のなかで，背景に商品思想の存在を容易に認められるからである。

今日われわれは商品学は商学の一分科であるということにとりわけ拘泥する必要もないようである。商学の一分科意識がどれだけ斯学の

特質、自律性を確立させたか甚だ疑わしい。このことは従来商品学への繰返しての反問がこれを証明している。また商品学の母胎は南種氏のいうような諸学、本草学および化学等ではない。人間が生存のために物あるいは生産物との切実な対決から、必然的に発生する顛倒のない使用価値知識の獲得欲に基礎をおき、いふならば使用価値を対象とするが故の使用価値学である。商品は生産物の一歴史的形態であり、この意味で現時点これを商品学と称することもできよう。

さて、商品は使用価値と価値との統一物であり、階級性を持っている。対象をこのような認識のもとに把えて、唯物、弁証法的に学問を進めるようになったのは、極く最近のことである。この点からいえば、商品学創設は今始まったばかりともいえるようである。

(昭和 49 年 8 月 8 日 受理)

文献調査の不足から、原稿完成後に博物学史として、白井光太郎著『日本博物学年表』のほかに、極く最近、昭和 48 年 11 月に上野益三著『日本博物学史』が出版されていたことを知った。この書物では白井の博物学時代区分に異なる見解を示している。このために筆者の論旨が著しく変わってくるというようなことはない。むしろ一層精細になり得たであろう。